

異文化理解のための「英米音楽文化論」

“British and American Music Culture”for Cross-Cultural Understanding

重 迫 和 美

Kazumi SHIGESAKO

キーワード：「英米音楽文化論」・異文化理解・日英比較文化・日英比較文学

はじめに

比治山大学現代文化学部言語文化学科には日本語文化コースと国際コミュニケーションコースの二コースがある。言語文化学科に入学した学生は、一年次は共通の課程に学び、二年次からどちらかのコースに分かれて、より専門的な課程で学ぶことになっている。日本語文化コースでは中学校教諭一種免許状（国語）と高等学校教諭一種免許状（国語）を、国際コミュニケーションコースでは中学校教諭一種免許状（英語）と高等学校教諭一種免許状（英語）を取得できる。

「英米音楽文化論」は、言語文化学科共通科目として一年次に設置された専門科目で、アメリカ文化・文学研究への導入の意味がある。同時に、教職課程（英語）の「教科に関する科目」中「異文化理解」の科目に該当する授業科目で、教職希望者に対して、外国における日常生活、社会生活、風俗習慣、地理・歴史、伝統文化、科学技術等の理解を深めさせ、さらに、日本におけるそれらとの類似点や相違点を考えさせる役割を担っている。授業の第一回から第十回までは、1950年代にアメリカで誕生したとされるロックのルーツと誕生後の発展を追いかけながら、1920年代から今日に至るアメリカ文化と社会を講じる。第十一回と第十二回は、ミュージシャン研究として、ボブ・ディランなどを取り上げて、音楽として表現された彼らの思想について議論する。第十三回から第十五回までは学生たち自ら設定した課題の研究発表である¹。

本論では、国際コミュニケーションコースの学生のみならず日本語文化コースの学生も履修する専門への導入授業科目の役割を果たしながら、同時に教職課程（英語）において「異文化理解」を誘う役割を果たすために、筆者がどのような工夫をしているかを報告したい。「異文化理解」の内容は先述の通り多岐に渡るが、本論では特に、外国の「日常生活」及び「地理・歴史」の理解について述べる。また、内容の取扱い上の留意点として挙げられる「日本の文化との比較」についても述べたい。

1. 「地理・歴史」の理解－外国の歴史、歴史上の出来事－

『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』によると、「地理・歴史」の項目としての内容は「外国の地勢や気候など自然環境及び産業、交通、観光などに関する事、また、外国の歴史、歴史上の出来事などに関する事を扱う。」(77)こととされている。そのため、本授業の内容として、アメリカの「歴史、歴史上の出来事」を扱うように心がけている。

まず注目したいのは、若者文化としてのロックが「1950年代のアメリカ」に誕生したのは偶然ではない点である。授業では、1920年代から1960年代までのアメリカの映像を提示して、その背景を解説する。1950年代に若者文化としてロックが流行った背景には、当時のアメリカの急速

な経済成長がある。遡ること、1920年代、エジソンやフォードのような人物を輩出したアメリカは、大量生産大量消費を基調とする資本主義経済を発展させた。豊かさは人々に余暇を与えた。娯楽が産業として成立するようになったのはこの頃である。1929年には世界恐慌が起こったものの、1945年に第二次世界大戦が終結すると、アメリカは空前の好景気を迎える。いわゆる「黄金の50年代」を迎えるのである。ナイロン、プラスチック、DDT、冷凍食品、レビットタウンなど、軍需産業から生まれた数々の人工化学物質や技術はアメリカ社会で人々の生活を潤した。ハイウェイの発達、郊外型住宅の発展、大型ショッピングセンターの開発、ファストフードの普及など、現在のアメリカ社会の原型が形成されたのもこの時期である。

終戦後、娯楽の産業化はますます進んだ。ラスベガスが「カジノの都」として有名になるのは戦後間も無い1940年代後半からである。ウォルト・ディズニーの長年の夢であったディズニーランドがロサンゼルスに誕生したのは1955年。50年代後半にはテレビ普及率は90%に達した。音楽に関わる技術革新については、33回転レコード（コロムビア社）の発売が1948年、45回転レコード（RCAビクター社）は1949年に発売開始となっている。経済は成長し続けて家庭は豊かになり、安価な商品が社会に溢れ、労働に直接関わらない若者世代も消費者となる余地が生まれ、若者文化としてロックが流行する素地が整ったと言える。

次に注目したいのは、ロックが「アメリカという場所」に誕生した歴史的背景である。授業では「ロックの誕生」という項目を設け、ロックのルーツを解説する。ロックのルーツとして、一般的に挙げられるのは、ニュー・ヨークのティン・パン・アリーのポップ、南部のブルース、南部のカントリー・アンド・ウェスタンといった三種の大衆音楽である。ティン・パン・アリーのポップにおける現代的商業性、ブルースの由来する黒人労働歌、カントリー・アンド・ウェスタンの由来する（主としてイギリスの）白人民謡、といったそれぞれの音楽の性質をさらに検討すれば、ロックが白人・黒人の音楽文化と現代・過去の歴史の接点に生じたこと、その接点がアメリカという特殊な土地であるからこそ生まれたことが理解できよう。

アメリカの「歴史、歴史上の出来事」を授業で焦点化する方策の一つとして、定期テストの出題形式を工夫している。まず、「音楽関係」と「社会・文化関係」の二つの語群を設定し、それぞれの語群に授業でのキーワードを列挙する²。解答者は、二つの語群からそれぞれ一つづつキーワードを選び、それらの関係について自分の意見を述べていく。ただし、その意見は、授業の内容をふまえたものでなければならない。この形式での出題は、単に到達度を計るためだけではなく、授業でアメリカの「歴史、歴史上の出来事」を焦点化するためでもあるから、定期テストの五週前には出題形式を公表するようにしている。

以上に述べた項目の他にも、授業では、終戦後の冷戦構造、朝鮮戦争、ベトナム戦争、公民権運動など、当時のロックの背景として、歴史、歴史上の出来事を解説するように計画している。

2. 日常生活の理解—ものの見方や考え方—

前掲の学習指導要領解説によると、「日常生活」の項目としての内容は「外国の人々の衣食住をはじめ、家庭生活、学校生活など広く日常の生活に関することや、ものの見方、考え方などを扱う。」(76)こととされている。そのため、本授業の内容として、アメリカ社会における「ものの見方や考え方」を扱うように心がけている。

「ものの見方や考え方」は、授業で扱うミュージシャンの生き方や作品にうかがうことができる。例えば、今年（2016年）、ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランは、本授業で毎年扱うミュー

ジシャンである。ノーベル文学賞がボブ・ディランに与えられることが発表された時、ミュージシャンが文学賞を受賞した事実に驚いた人々も多かったようであるが、実は彼の歌詞表現は、詩としても十分批評に耐える力を備えている。授業では、まず、ボブ・ディランの生き方を映像やインタビューを交えて紹介し、貧しい出自の彼が歌を武器に社会改革を目指すようになる過程、公民権運動への参加、社会から個人の内面への問題意識の変化を押さえる。さらに、代表曲「風に吹かれて」を取り上げて、英語を日本語に訳して意味を考える。授業では、他にも、USA フォー・アフリカの「ウィー・アー・ザ・ワールド」などのメッセージ性が高い曲を取り上げて、アメリカにおける「ものの見方や考え方」に言及することになっている。

歌詞内容の考察によって学生に他者の「ものの見方や考え方」を理解させようとする際、その理解が教員の解釈に引きずられないように留意したい。グループディスカッションの手法で学習者がお互いに意見交換できる場を設定すれば、教員の影響を受けることが少ない。この手法は、教員が予測できないような学習者独自の解釈が生まれることもあり、詩の理解自体も深まって一層効果的である。ミュージシャンの人生や当時の社会背景など、多くの情報を提供しなければならない毎回の授業においては十分な時間を取ることができないが、筆者の場合、第十一回と第十二回の授業をグループディスカッションの時間に充てて、あるミュージシャンの代表曲の解釈を議論させている。2016年度は、第十一回にボブ・ディランを、第十二回にブルース・スプリングスティーンを取り上げた。

ある曲の歌詞の解釈を通して自ら考察するばかりでなく、ミュージシャンの生き方や発言に当時の人々がどのように反応したかを示すことによって、一般的な「ものの見方や考え方」に触れることもできる。ビートルズの二度のアメリカツアーに対するアメリカの人々の反応の違いを示すのは効果的である。1964年に好意を持ってアメリカに迎えられた彼らは、1966年にはバッシングの憂き目にあった。きっかけは、ジョン・レノンの「今の僕らはキリストより人気がある。」(223)³という発言である。イギリスの『イブニング・スタンダード』紙でのこの発言は、アメリカの雑誌『デイトブック』に転載され、熱心なキリスト教信者が多いアメリカ南部で、レコードの焼却などの大きなビートルズ排斥運動が起こった。公的に特定の宗教に肩入れしない日本の地から見ると、ミュージシャンの何気ない一言が、なぜ大きな騒ぎに発展したのかは理解し難いかもしれない。しかし、清教徒の移住が国の起りの発端にあるアメリカにとっては、何気ない場での発言であろうと、発言の文脈がどうであろうと、大問題だった。授業では、このエピソードを、ブリティッシュ・インベイジョンについて述べる回に、必ず盛り込むことにしている。

以上のように、ミュージシャンの生き方や作品、またそれらに対するアメリカの人々の反応を通して、アメリカ社会における「ものの見方や考え方」を学ぶことができる。授業では、その他に、ジミ・ヘンドリックスやイーグルスなども取り上げている。

3 多文化理解－日本の文化との比較－

前掲の学習指導要領解説は、異文化理解で教える内容の取扱いとして学習指導要領に挙げられた、「必要に応じて、我が国の事情や文化などを取り上げ、外国の事情や文化との類似点や相違点について考えさせるとともに、他の教科等との関連にも配慮するものとする。」(77)の解説として、「異文化を理解するということは、外国の事情や異文化に関する知識を得ることにとどまらず、自分の文化との相対的關係において理解することである。すなわち、異文化と対峙することによって、自分の文化がどのようなものであるのか、また、相手の文化がどのようなものであるのかが、よりよ

く理解できるようになるということである。この意味で、『我が国の事情や文化などを取り上げる』ことが大切である。(77)と述べている。本授業では、異文化理解の内容だけでなく、取扱いにも注意し、最後の三回分を割いて行う研究発表で日本文化との比較という視点が養われるようにしている。

研究発表は基本的にはグループ単位で行う。発表に充てることのできる授業時数の限界があるために時として調整することもあるが、グループ編成は学習者に自由に決めさせている。上位学年の学生が受講することもあり、また、近年多様な学生も増えてきていることから、発表は単独で行っても良いとしている。研究テーマも学習者に自由に選択させている。ただし、条件として、音楽に関するものであること、その音楽の社会背景を考えさせるように工夫すること、を挙げている。

日本文化との比較という視点を、全ての研究発表が持つわけではない。しかし、これまでの授業経験から、全体の中の幾つかにその視点を持つものが必ずある。今年度を例にとると、レディー・ガガと日本文化の関係を研究したものがあった。ガガが親日家であることは広く知られている。東日本大震災が起これ、来日をキャンセルする著名人が相次ぐ中、彼女は直後に来日した。伝統文化、建築、アニメなど広範囲に渡る日本文化が、ガガという今日アメリカを代表する表現者の手でいかなる作品となっているかを知ることで、日本文化との比較という視点を持つことができよう。過去には、「ヒップ・ホップの日米比較」や「日本におけるジャズ」のようなテーマもあった。音楽としてのルーツは同じであっても、それを作品化する社会や文化の違いによって、作品としての表現は変化する。学習者の研究発表は、作品の表層に現れた相違点の指摘に止まる場合が多いが、教員が質疑応答の際に「相違点がなぜ生まれたか」と発問することで、相違点を生む原因としての社会や文化の違いへと学習者の問題意識を誘うことができる。発表後の質疑応答で、学習者が教員の発問に明瞭に答えられないとしても、文化の違いに目を向けるという意識は持つことができよう。

研究発表の機会だけでなく、講義の際の教員の発問によって、学習者に日本文化を比較する視点を意識させることができる。例えば、ビートルズを紹介する時、アメリカだけでなく日本における彼らに対する反応をも紹介する。国や文化によって、ビートルズへの反応の違いが見られるのかどうかを学習者に問い、彼らが考えたことを毎回提出させる授業ノートに記録させるのである。提出させた授業ノートは点検後、翌週返却する。返却時に、日本文化を比較する視点からの学習者の意見を披露するのは効果的である。その他にも、定期テストの発問を、文化比較の視点から行うことも可能だろう。

おわりに 授業評価アンケートから見る「英米音楽文化論」の「異文化理解」効果

本学で毎学期行われる「授業評価アンケート」には授業評価項目として①授業目標の明確さ、②授業の理解度、③授業への工夫、④聞き取りやすさ、⑤集中できる雰囲気、⑥自己向上に有意義、⑦全体的満足度、の計七項目があり、どの項目も5点満点で評価される。参考までに2016年度の本授業の評価を項目毎に記すと、①「授業目標の明確さ」は4.26、②「授業の理解度」は4.14、③「授業への工夫」は4.11、④「聞き取りやすさ」は4.39、⑤「集中できる雰囲気」は4.19、⑥「自己向上に有意義」は4.22、⑦「全体的満足度」は4.19となっている。

本授業が「異文化理解」の役割を果たすことができているかは、同アンケートの自由記述から判断できる。自由記述の中には、「様々な時代背景が知れてよかった。もっと詳しく知りたいと思った。」、「ミュージシャンを通し、時代の流れを知る事が出来良かったです。」、「難しい内容だったが良かったです。もっとアメリカの歴史について知りたいです。」とあり、本授業が「外国の歴史、

歴史上の出来事」を理解するのに役立っていることがわかる。また、「あまり洋楽をきかないので、わからないことばかりでした。でも洋楽に興味がでて、色々調べてみようと思いました。」「日本以外の音楽、歴史について詳しくなった。」「世界の色々な音楽を聴いて日本との音楽は違うようで似ているんじゃないのかと思った。だから邦楽だけでなく洋楽も今後聴いていきたい。」とあり、「外国の事情や文化との類似点や相違点について考えさせる」ことにも成功している。

今年度について言えば、「アメリカ社会におけるものの見方や考え方」を学習者が理解できたかどうかについては、授業評価アンケートからうかがい知ることができなかった⁴。しかし、定期試験として課した小論文の中で、ボブ・ディランやビートルズの生き方や考え方を論じた者がいたことから、本項目についても、本授業は一定の効果があると言うことができそうである。今後は、社会の急速なグローバル化をも視野に入れた「国際理解」の内容を意識して授業内容を計画する必要があるだろう。

注

- ¹ 2016年度の本授業科目の授業計画は、第一回「ロック概観」、第二回「エルヴィス・プレスリー：アメリカの繁栄」、第三回「R & Rの死：激動の60年代」、第四回「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド：ヒッピー文化」、第五回「ローリング・ストーンズ：ビート族」、第六回「ボブ・ディラン：公民権運動」、第七回「ウッドストック・フェスティバル：愛と平和と音楽」、第八回「ジャニス・ジョプリン：アシッド・ドリームズ」、第九回「ロック・スピリットの死：ベトナム戦争」、第十回「バンド・エイド以降」、第十一回「音楽と社会：ボブ・ディランの生き方と思想」、第十二回「音楽と社会：ブルース・スプリングスティーンの生き方と思想」、第十三回「研究発表1」、第十四回「研究発表2」、第十五回「研究発表3」であった。
- ² 2016年度の定期テストにおいて、語群A（音楽関係）に挙げたキーワードは、「ボブ・ディラン」、「ジャニス・ジョプリン」、「ローリング・ストーンズ」、「ウィー・アー・ザ・ワールド」、「サイケデリック・ロック」、「パンク・ロック」の六つ。語群B（社会・文化関係）に挙げたキーワードは、「アメリカの黄金の50年代」、「ベトナム戦争」、「アメリカ公民権運動」、「ウッドストック・フェスティバル」、「ビート・ジェネレーション」、「現代アメリカを取り巻く情勢（政治・経済問題など）」の六つであった。
- ³ ジョン・レノンの発言の前後を引用すると、「キリスト教はなくなるよ。いつか衰えていって消えるだろう。そんなことあれこれ論じる必要もない。僕の言ってることは正しいし、いつか正しいことが証明されるはずだ。今の僕らはキリストより人気がある。ロックン・ロールとキリスト教と、どっちが先にすたれるかはわからないけど。キリストそのものには問題なかった、でも彼の弟子たちが頭の悪い凡人だったんだよ。僕に言わせれば、彼らがキリスト教をねじ曲げて墮落させたんだ。」(223)である。「今の僕ら」という限定的な表現や、キリスト自体を否定していない点から、レノンは、現代のキリスト教のあり方に対して疑問は持っているが、それをもって全面的にキリスト教を批判しているわけではないことが理解できる。
- ⁴ すでに挙げたものの他に、アンケート自由記述には「洋楽が好きで、自分の知らない洋楽の歴史がしれてよかった。」「アメリカ、イギリスの音楽史を学べて良かった。」「知らない洋楽を聴けて知る事ができよかったです。」「音楽に興味があったので楽しかったです。アメリカの昔の音楽事情がしれてよかった。」「昔のロックなど音楽の歴史をしれたのが良かった。」「音楽について、もっと知る事が出来、前のヒット曲などを知れたのでこの授業を受けてよかったです。」「色々なことを学べたと思う。」といった授業内容に関する肯定的な評価が多かった。授業で毎回

ノートを取らせる授業の方法については、「ノートの取り方など今後活かせることを学びました。」という肯定的な評価があった。ただし、研究発表については、「発表するのはいいんですが、発表内容が薄すぎて質問すら思いつかないし、きちんと発表の仕方を教えてから生徒に発表させたほうが良いと思う。ただネットで調べたことだけを発表されてまとめや考察がほとんど見受けられない。」と辛口のコメントもあった。研究発表までの段階的な指導を授業に組み込むとともに、研究発表の仕方を学ぶ「初年次セミナー」との連携も、今後の課題であろう。

引用文献

- ビートルズ・クラブ『ビートルズ・アンソロジー』リットーミュージック、2000年。
文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版、2010年。